西側へ広がる赤田横穴墓群

赤田横穴墓群　西大寺赤田町一丁目

奈良盆地北西部では６世紀後半から７世紀中頃にかけて、丘陵の南斜面に横穴を掘削し遺体を埋葬する「横穴墓」が造られます。遺体は陶棺と呼ばれる素焼きの棺や木棺に埋葬されています。今回紹介する赤田横穴墓群はその代表的な遺跡です。これまで古墳時代後期から飛鳥時代の横穴墓が16 基確認されていましたが、令和３年度の大和中央道建設に伴う発掘調査で新たに西側へ続く８基の横穴墓が見つかりました。

新たに確認した横穴墓　17～24号墓はその配置状態から17～19号墓（東群）・20～22号墓（中央群）・23～24号墓（西群）の３群に分かれて造られた可能性が考えられます。３群ともに６世紀後半から造られ始め、東群と中央群では亀甲形陶棺を初葬とするようですが、西群では当初から木棺であるという違いが見て取れます。なお、22号墓には墓室がなく埋葬されずに放棄されたとみられます。

亀甲形陶棺は 17・21 号墓で確認できたのみで、１～９号墓の調査成果と比べて木棺埋葬が目立つのが特徴的です。また、21 号墓では鹿角装刀子１点を内部に収めた土師器甕が出土し、これが蔵骨器として利用されたことが推定できます。

調査地位置図（1/25,000）

最終段階（７世紀中頃）の 18・19 号墓では、円筒形陶棺や埴輪の樹立を確認しました。18 号墓では墓室東側から蓋身を合わせロにして横たえた円筒形陶棺が見つかり、棺内からは鹿角装刀子１点・鉄鏃１点が出土しました。19 号墓では規模の小さい墓室内に木棺底板の一部が残存し、墓室入口で朝顔形埴輪と人物埴輪が倒れた状態で出土しました。墓室入口に埴輪２本を立てた後、墓道に土を積み上げて閉塞した様子がうかがえます。

赤田横穴墓群（北西から）

墓室入口に樹立された埴輪　19 号墓の墓室入口に立てられたと推定される朝顔形埴輪と人物埴輪を当時の状態に置き直して撮影したのが右の写真です。朝顔形埴輪は底部と頸部～口縁部、人物埴輪は底部と頭部及び腕部が欠失しており、19 号墓築造時期よりも古い 6 世紀前半～中頃のものと推定されます。埴輪の底部が欠失するのは近在の古墳から抜き取ってきて再利用したためであり、その時点ですでに口縁部や頭部は欠損していたと想定できます。埴輪を陶棺の下に敷いて再利用した事例は赤田 7 号墓で確認されていますが、樹立させて再利用した事例は初めてです。赤田横穴墓群は埴輪生産にかつて関与した土師氏の墓域の一つと推測できるため、祖先の古墳に遺存した埴輪の一部を自らの墓に再利用して氏族伝承を再確認したのではないでしょうか。

横たわる円筒形陶棺　18 号墓出土の円筒形陶棺は、蓋身を合わせ口にして横たわる状態で出土しました。赤田 9 号墓から以前出土した円筒形陶棺が縦置き型であったのに対して、今回の出土例は横置き型となっています。両者の大きな違いは蓋の形状にあります。縦置き型は蓋が半球形で、身の口縁を覆う程度の大きさです。一方、横置き型の蓋は身とほぼ同じ大きさのバケツ形になっていて、縦置きには不適合な形状となっています。

円筒形陶棺は棺身が徐々に小さくなり、身と蓋が一体化して砲弾形陶棺が生まれると考えています。18 号墓の棺身は 9 号墓例よりもさらに小さく、砲弾形陶棺に近い大きさです。蓋受けの張出しが弱く、紐穴もありません。蓋の口径が少し小さく身の蓋受けまで蓋を挿入できないため、やむを得ず合わせ口の状態で埋葬されたと思われます。縦置き型の円筒形陶棺が横置き化していく中で、この円筒形陶棺は砲弾形陶棺と併行してつくられたのでしょう。

亀甲形陶棺　17号墓の亀甲形陶棺は全長 212 ㎝で、10 行 3 列合計 30 本の脚があります。未盗掘の状態で出土しましたが、棺内からは刀子 1 点が副葬されていただけでした。形状が類似する 5 号墓北陶棺から豊富な副葬品が出土したのとは対照的です。21 号墓の亀甲形陶棺は盗掘による破砕を受けて一部が残存するだけです。棺身には 8 行 3 列合計 24 本の脚が復元でき、外面の縦位突帯が横位突帯より上へ突き抜けないのが特徴的です。

19 号墓の墓室入口に樹立された埴輪（復元配置）

18 号墓に埋葬された円筒形陶棺

17 号墓に埋葬された亀甲形陶棺